

〈特別活動〉

中学校部活動の教育的効果の工夫

—互いの良さを認め合う学級活動を通して—

宜野湾市立 嘉数中学校教諭 金城 力

I テーマ設定の理由

昔の子どもは、兄弟姉妹や隣近所の異年齢集団からなる友だちと群れて遊ぶ体験を通して多くのことを身につけた経緯がある。そこには、子どもの社会が存在しており、仲間関係が生まれ、ルールや約束事を守ることの大切さが日々の生活で自然に培われていた。しかし、最近の子どもの生活は、核家族化、少子化、情報化等の影響を受け、人間関係のつながりが希薄していく中で「社会性・協調性・道徳心・コミュニケーション能力」など、社会への適応能力の不足は深刻である。この問題を解決するためには、学校及び地域社会全体で教育力を高め、長いスパンで子どもたちを育てていく必要がある。

『中学校学習指導要領特別活動』には、「望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団生活の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てると共に、人間としての生き方について自覚を深め自己を活かす能力を養う」ことを目標に掲げ、自分の生き方を考える生徒の育成が必要と述べている。さらに『総則』では、「生徒の自主的、自発的な参加により行われる部活動については、スポーツや文化及び科学等に親しませ、学習意欲の向上や責任感、連帯感の涵養等に資するもの」とし、部活動の効果についても記している。

このことから、学校教育が担っている大きな使命として、集団生活を通して社会人を育成するという教育活動の意義が大きいと考える。

学校や学級も小さいながらも生徒たちにとっての社会であり、その中で仲間の気持ちを考えながら自分の思いを伝えていくコミュニケーション能力を身につけることが、将来、社会人として生きていく力になるものだと考えることができる。中学校生活における部活動も、自分の考えを構築し行動していく上では大きなウェイトを占めている。なぜならば、自主的・自発的に意見を述べ、連帯感をもって行動する場面を設定しやすく、効果も顕著に現れる。ここで身につけた良好な人間関係を築くためのスキルや連帯感は、生徒の今後の人生にも大きな影響を与えていくと考える。

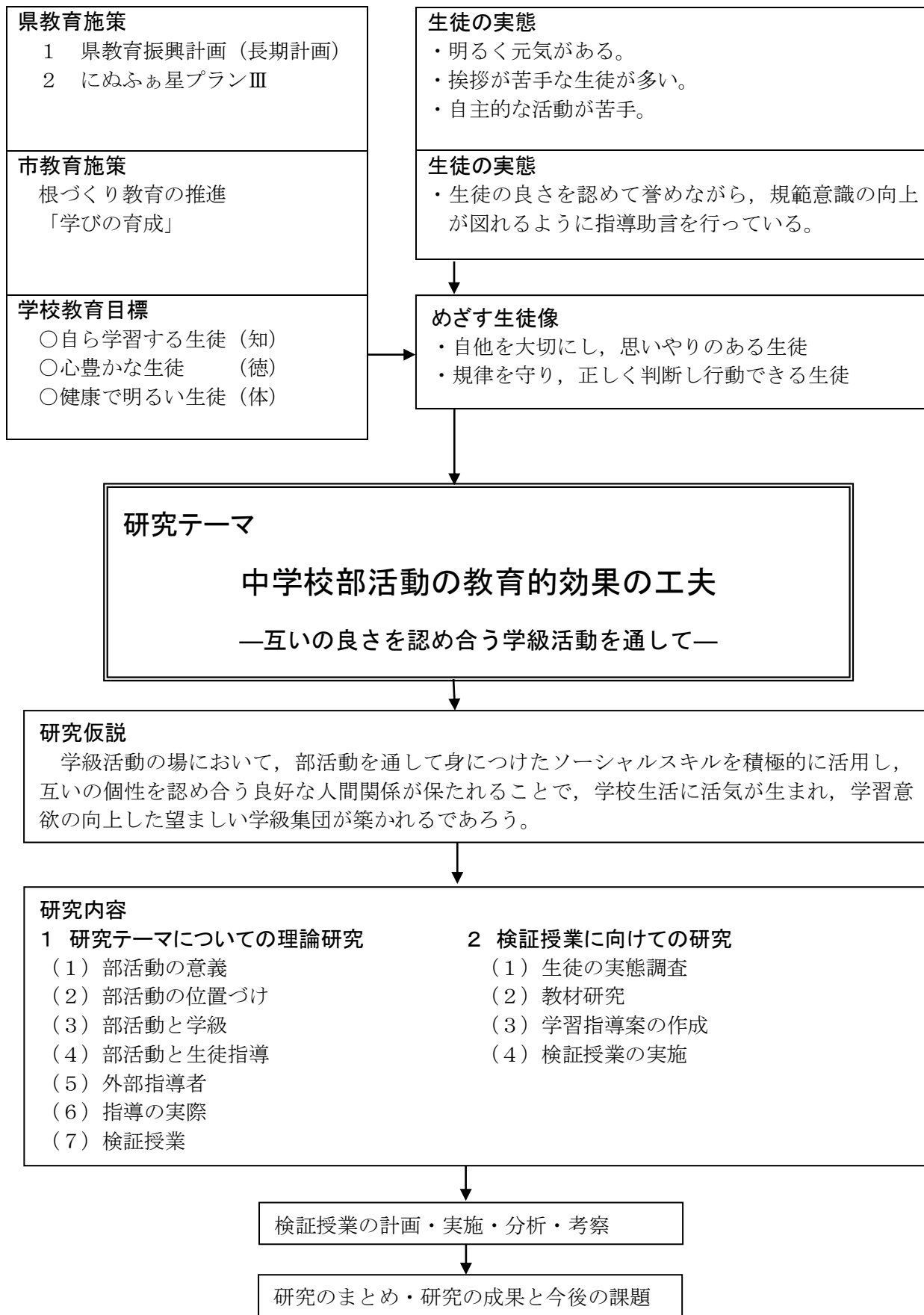
学級の実態を観ると、明るい雰囲気では活動や清掃活動など、仲間と協力し頑張ろうとする生徒が多い。授業中もけじめがあり、学習にも積極的に取り組もうとする。そして、主体的に自分の考えを述べ、仲間の意見も引き出そうと努力する生徒もいる。しかし、少数だが自己中心的な発言や行動をとったりして、仲間とのコミュニケーションを上手くとれない生徒がいる。そのような生徒たちが互いの良さを知り、仲間と仲良く助け合いながら学校生活を送れるような体験を通して生徒を育て、よりよい関わりの場を、学級集団において体験させ学ばせたい。

そこで、本研究では部活動で身につけているソーシャルスキルを、学級活動で積極的に活用し、望ましい人間関係の育成をめざして本テーマを設定した。

II 研究仮説

学級活動の場において、部活動を通して身につけたソーシャルスキルを積極的に活用し、互いの個性を認め合う良好な人間関係が保たれることで、学校生活に活気が生まれ学習意欲の向上した望ましい学級集団が築かれるであろう。

Ⅲ 研究構想図



IV 研究内容

『部活動指導』全体構想

学校教育目標

<p>○自ら学習する生徒（知）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・目標を持って自主的に学習する。 ・学習の方法を身につけ、自ら課題を見つけ学ぶ。 ・物事を深く考え、正しく判断する。 	<p>○心豊かな生徒（徳）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・平和を愛し自他を尊重する。 ・思いやりがあり、感謝する。 ・相手の気持ちを考え、礼儀正しく対応する。 ・自分の気持ちを適切な言葉で表現する。 	<p>○健康で明るい生徒（体）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・健康や安全に気をつけ生活する。 ・生活リズムを確立し心身を鍛え目標達成のため努力する。 ・勤労を重んじ責任をもって行動する。
--	--	---

めざす学校像

- (1)常に安心・安全に努める学校
- (2)学ぶ楽しさ喜びを感じることができる学校
- (3)生徒の個性・能力を伸ばす学校
- (4)教師が使命感を持ち、専門性を発揮した指導ができる学校
- (5)地域に開かれ、信頼される学校

めざす生徒像

- (1)自ら課題を見つけ学習する生徒
- (2)自他を大切にし、思いやりのある生徒
- (3)心身ともに健康で明るくたくましい生徒
- (4)規律を守り正しく判断し行動できる生徒
- (5)夢と希望を持ち、夢実現のため粘り強く努力する生徒

部活動指導の目的と目標

- (1)学年・学級を離れ共通の興味・関心のある者で組織し、豊かな人間関係を構築する。
(あいさつ言葉使い等の礼節指導の徹底)
- (2)心身ともに健全で、気力・体力ともに充実した生徒の育成を目指す。
(校則・部員心得の厳守)

積極的な部活動指導の推進

[3つの柱の育成]

「基本的な生活習慣の育成」

「学級活動の活性化」

「学習意欲の向上」

部活動の充実	生徒指導	学級活動	生徒会	授業・学習	食教育
<ul style="list-style-type: none"> ・顧問が積極的に関わる ・計画的に体力作りをおこなう ・コミュニケーション能力を深める ・欠席状況の把握 ・保護者との連携 	<ul style="list-style-type: none"> ・生活の基礎・基本となる指導の徹底 ・生徒一人一人を大切にす指導 ・規範意識を身につけさせる指導 ・問題行動を未然に防ぐ指導 	<ul style="list-style-type: none"> ・リーダーを中心とした活動 ・学級における諸問題解決 ・自己及び他者の個性の理解と尊重 ・望ましい人間関係の確立 ・進路選択と将来設計 	<ul style="list-style-type: none"> ・リーダーの育成 ・主体的な学校行事への取組 ・学級との連携強化により学校生活の改善向上 ・専門委員会の積極的な取組 	<ul style="list-style-type: none"> ・基礎・基本の徹底（平均定着率80%） ・学習規律の徹底 ・学ぶ意欲を喚起する授業の工夫改善。 ・家庭学習の充実 ・互いに学び合う学習活動 	<ul style="list-style-type: none"> ・食事の喜び、楽しさを理解する ・食物に感謝する心を育て。 ・成長期における食事の重要性を理解する ・給食の意義を理解する

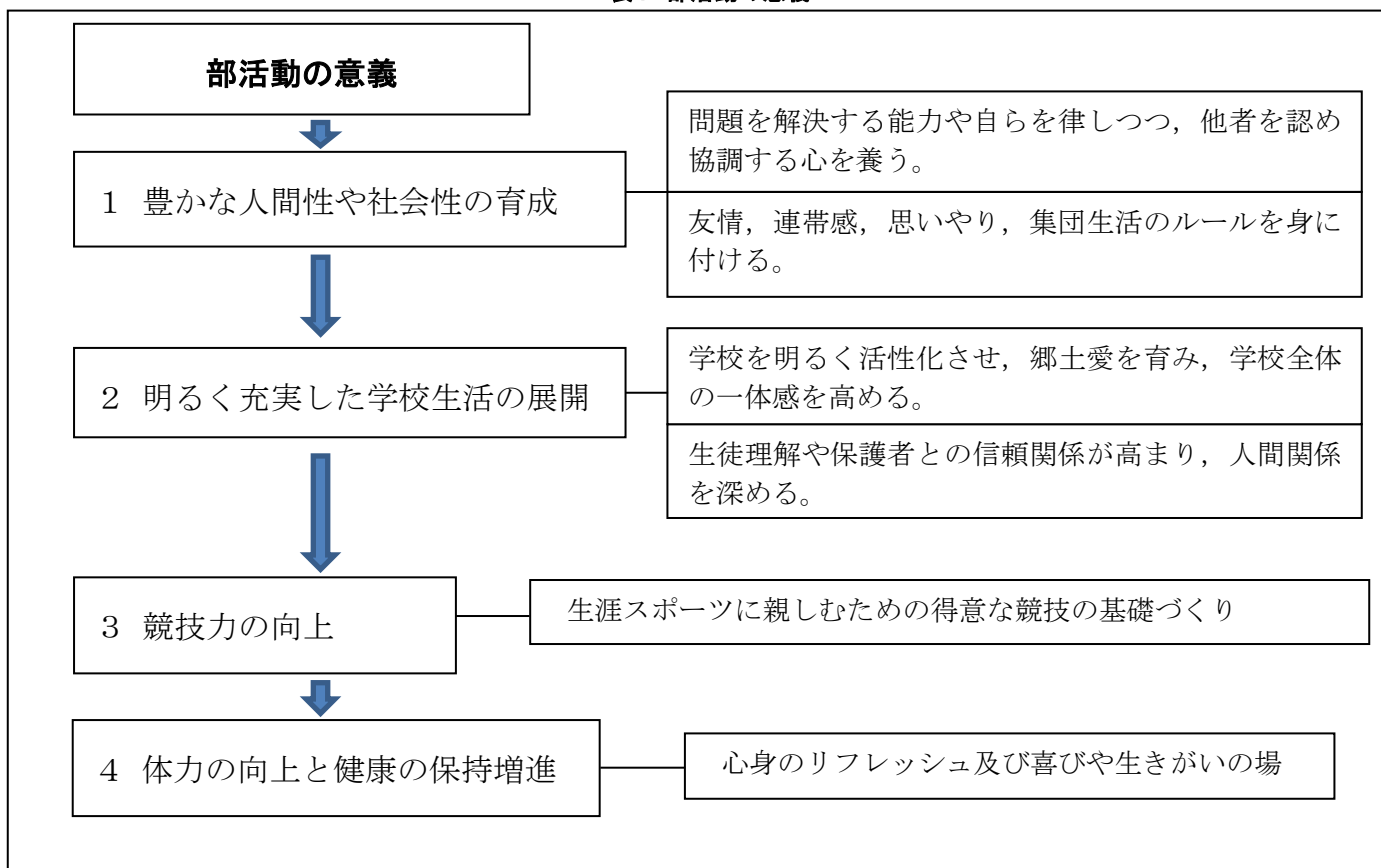
1 部活動の意義

中学校期は、子どもから大人へと移り変わる境界線であり、心身的成熟だけでなく、人間形成から見ても大切な節目である。その時期の部活動は、学校教育活動の一環として、スポーツに興味と関心を持つ同行の児童生徒が、教員等の指導の下に、自発的・自主的にスポーツを行うものであり、より高い水準の技能や記録に挑戦する中で、スポーツの楽しさや喜びを味わい、学校生活に感動を呼び込み、心の豊かさをもたらす。また、生徒が授業の中で、身に付けた技能等を発展・充実させることができるものでもある。逆に部活動での成果を授業の中で生かし、他の生徒へも広めていくこともできるものでもある。さらに、学級や学年の枠をこえて、生徒が活動を組織し展開することにより、生徒の自主性、協調性、責任感、連帯感、などを育成し、仲間や教師（顧問）と密接に触れ合う場としても大きな意義を有するものである。部活動の意義としては以下の事が言える。

- (1) 心身をリフレッシュさせるだけでなく、仲間とともに自主的・自発的に行う活動が多く、生徒に喜びと生きがいをもたらす、学校生活を豊かで充実したものにする。
- (2) 共通の目標に向かって努力する過程を通じて、顧問と生徒、生徒同士の信頼関係が深まり、教員にとっても、生徒理解をより深めるための重要な機会である。
- (3) 学級や学年を離れた集団の中で、互いに認め合い、励まし合い、高め合いながら自己の存在や責任を見つめ、豊かな社会性や人間性を育成する。
- (4) 部活動の充実により、生徒一人一人の教育活動全般への意欲が高まり、学校全体が明るい雰囲気、気で活性化する。
- (5) 競技力の向上や、スポーツの普及・発展に重要な役割を果たす。
- (6) スポーツの専門的スキルや知識を身に付け、生涯にわたってスポーツに親しむ能力や態度を育てるとともに、体力の向上と健康の増進を図る。

このように、部活動は、心身ともに健康になり、より多くの人との触れ合う機会が増え、必然的に人間形成の場面設定ができる。部活動の適切な運営は、社会で通用する生きる力を身につけさせるためには必要である。そうすることで生徒の明るい将来を保障することにもつながるのである。

表1 部活動の意義



2 部活動の位置づけ

中学校で行われている部活動は、「共通の種目や分野に興味・関心を持った生徒たちが、学級や学年の枠を超えて集まり、自発的・自主的に行う課外活動である。」新学習指導要領において、次のように位置づけられた。

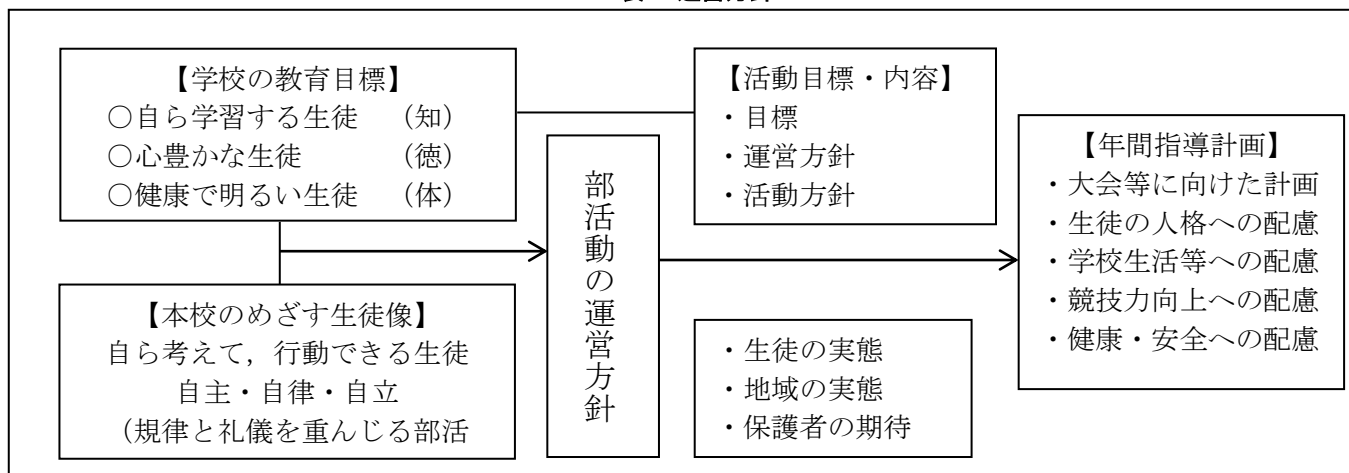
表2 部活動の位置づけ（文部科学省）

<p>【中学校学習指導要領】</p> <p>第1章 総則</p> <p>第4 指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項</p> <p>2（13）</p> <p>生徒の自主的、自発的な参加により行われる部活動については、スポーツや文化及び科学等に親しませ、学習意欲の向上や責任感、連帯感の涵養等に資するものであり、学校教育の一環として、教育課程との関連が図られるよう留意すること。その際、地域や学校の実態に応じ、地域の人々の協力、社会教育施設や社会教育関係団体等の各種団体との連携などの運営上の工夫を行うようにすること。</p>

表2は、部活動がこれまで果たしてきた意義や役割を踏まえ、改めて学校教育の一環であることを示したものである。これを受け、各学校は、具体的な指導計画を作成することが望ましいと考える。指導計画の作成にあたって考慮すべきことは、地域の特性・学校の実態・生徒の実態等をいろいろな視点から観て、教育目標に沿った、全体で調和のとれた指導計画にしなければ、組織的な教育効果が得られなくなるので注意したい。そこで、学校長を中心とした責任体制のもと、学校全体で推進していくことが重要である。

部活動は、計画的に行う教育活動であり、学校教育活動全体を通じて適切に行われるべきものであることから、部活指導を学校の組織として機能させたい。そのためには、校務分掌に部活動主任を設置し、部活動顧問を位置づけ、実態に応じて職員会議や顧問会議を行うことで機能できると考える。

表3 運営方針



(1) 全教職員による評価

部活動を学校教育の一環として捉え、教育効果を高めるためには、全教職員による各部活動の評価が効果的と考える。教師と生徒が互いに意識することで、互いの関心が高まり学習活動にもよい影響を与える。目指す生徒像に向かって、生徒が何をどのように学び、どのように成長したかについて共通の規準で評価していく。

ここでのねらいは、部活動を通じた生徒の成長を、学校内で理解されることである。部活動優先に偏ったり、学校生活が無気力の姿勢であったり、顧問以外の教員への態度が悪いなど、学力向上にマイナスになってはいけない。部活動で身につけたスキルを全教職員が適切な評価を行うことで、プラスの効果が向上する。顧問以外の教職員も評価していることを生徒に意識させることで、活気ある学校生活が送れ、学習効果も高まっていく。

3 部活動と学級

吉村斉（1997）は、部活動が学校生活への適応感に及ぼす影響について検討し、部活動への満足感が高い部員は学校生活全体への満足感も高くなることを報告している。また、角谷・無藤（2001）は、クラスでの欲求満足度の低い中学生にとって部活動は学校生活への満足度を高めてくれる要因になりうることを指摘している。さらに宮坂（1959）は部活動で養われた興味や自信が教科学習への動機付けを高めることを指摘している。これらの知見から、部活動に対する積極的な関与は学校生活への活力となり、学業に対する意欲や関心を高めることが予想されると記されている。

部活動を見ると、各競技ともに体験活動を積極的に展開しながら、部員たちの中である程度のルールとリレーションが確立され、対人関係の大切さを意識して活動が行われている。その活動をしている部員たちには、異年齢が存在する。部活集団が目標を達成するには、ある程度の緊張感の中で、一人一人の自己判断と自己決定の場が必要となり、ルールとリレーションを守りながら集団が団結し、他の団体と競技を競い合い、互いに切磋琢磨して技術力や人間性が身についていく。目標が達成されると一層、連帯感が増し、互いの人間関係も深まっていく。先輩から後輩へと正しいルールやリレーションが引き継がれていけば、良好な人間関係を築くためのスキルが身につけていくため、後輩は自信をもって、学校生活を送ることができ、自尊感情や自己肯定感も高まる。そういう部活動で身につけたソーシャルスキルを、学級集団の中でよりよく活用して、互いの良さを認め合いながら体験学習を展開することで、学級の雰囲気も良くなり、授業態度も改善され、学習意欲も向上するのではないかと考える。

学校は、学級集団を単位にして、生徒たちに生活や授業、活動等の体験学習を展開して行く中で、小さいながらも生徒たちの社会ができていて重要な教育環境である。しかし、学級集団を見てみると対人関係が稀薄化しているために精神的にも幼くなってきている。その結果、自己判断が苦手な、周りの雰囲気に流されやすくなっている。学級集団が良い関係であれば、「学習面」と「生活面」がよくなっていくのではないだろうか。逆に学級集団の状態が良好でなければ「学力定着の低下」、「いじめ問題の増加」といったマイナスの要因が増えていくと言える。良好な学級集団「生徒たちにとって居心地の良い学級」を作っていくためには、今の学級がどんな状況にあるのかを知り、現状を把握する必要がある。そして現状にそった改善を行いながら、ルールとリレーションを確立する必要があると考える。生徒には誰にでも長所と短所がある。短所ばかり見てはよりよい人間関係は築けない。集団の中で仲間の長所を発見し、それぞれの個性を素直に理解することは「互いの良さを認め合う」ことにつながる。そのためには、いろいろな生徒と集団活動を共にすることが大切で、教師はそれぞれの生徒の良さを引き出せるような、場面設定を工夫する必要がある。また、生徒は自分の良さを認めてもらうことにより、集団の中での存在感を味わい、学校生活も楽しくなり、もっている力も発揮する。そして、集団の質もより一層高くなっていく。集団の良さを、よりよいものにして行くには、自分の立場を他者に理解してもらい、他者の立場も理解し、集団の中で自分の考えを、どの場面で主張すればいいのか、さらに、どの場面で他者の意見を尊重すればいいのか、そういう他者との関わり方のスキルを身につければ、互いの良さを認めることができるようになる。

そこで、部活動で身につけたソーシャルスキルと学級で体験した学習が連携された教育活動を実践することによって、良好な人間関係が保たれようになり、生徒たちが学校生活に充実感を覚え、学級単位で行われている学習活動がより活発になり、学習意欲が向上した集団に近づくと考える。

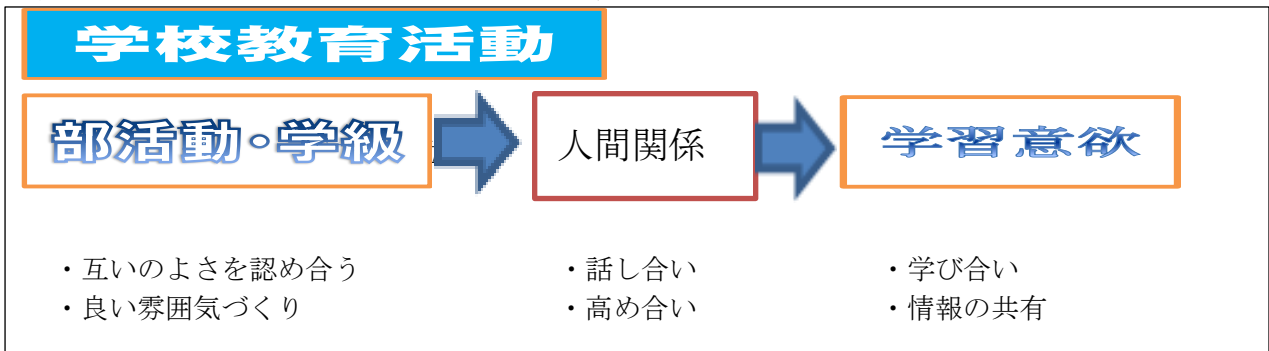


図1 部活動と学習意欲

4 部活動と生徒指導

生徒指導は、一人一人の生徒の人格を尊重し、個性の伸長を図りながら、社会的資質や行動力を高めることを目指して行われる教育活動で、生徒それぞれの人格のよりよい発達を目指すとともに学校生活がすべての生徒にとって有意義で興味深く、充実したものになることを目指している。学習指導と並んで学校教育において重要な意義がある。その指導の場は、学校生活全体を通じて学習指導の場を含む、授業中や休み時間、放課後の部活動や地域における体験活動の場においても生徒指導を行うことが必要である。

部活動は、自己選択による集団活動の中で個性を伸ばす活動であり、共通の興味や関心を持つ生徒が、学年や学級の所属を離れて行う活動である。この部活動を通して、子どもたちは専門的な知識や技能・たくましく健やかな身体を身につける。また先輩や後輩、指導者や関係する方々も含めて仲間や他者を尊重する態度や感謝する心が育まれる。さらに、時間を守り礼儀正しく行動するなどの基本的な生活習慣を身につけることもできる。

一般的に、中学校で部活動が重視されている理由として生徒指導上の役割がある。その役割とは、以下のようなものである。

- (1) スポーツに打ち込むことで、集団の規律とけじめのある自律した生活態度を養う。
- (2) 日常のストレスを体を動かすことで発散させる。
- (3) 活動を通じて異学年との望ましい関係や礼儀を身につける。
- (4) 試合などを通じ、他校との交流を深める。
- (5) 休日に活動することで、問題行動の発生を未然に防ぐ。
- (6) 基本的な生活習慣の確立

以上のように、部活動は生徒指導の面からも、とても重要な役割であるが、行き過ぎた指導や指導を受ける側の捉え方で、逆効果になる場合があることも考慮しなければならないことである。

5 部活動と学習の両立

部活動と学習の両立は、中学生にとっては大きなテーマである。『ベネッセ教育総合研究所』によると、部活動に打ち込むことは、必ずしも学習の負担になっているわけではない。部活動の「参加状況」と平日の「学習時間」の関係を見ると、運動部、文化部問わず、積極的に部活動に取り組む生徒の方が、平均学習時間が長い。部活動に打ち込む生徒は、学習にも積極的で学習時間も長い。と記され、さらに、学習内容の内訳を見ると、部活動に積極的な生徒の方が、「学習をほとんどしない」の割合が、低いことが注目される。「部活動を通して物事に打ち込む姿勢や、学校生活が楽しいという実感が得られることが、日々の学習意欲にも影響しているのではないか」と分析する。また、定期テストの対策を始める時期を尋ねた調査からも、部活動に積極的な生徒の方が、テスト勉強を始める時期が早いことが分かっている。それは部活動の忙しさをあらかじめ見越して、計画的に学習を進める生徒が多いと推察される。

部活動で培われた生活習慣や計画性は、日々の家庭学習習慣の確立にもよい影響を与えている。部活動への参加が学校生活に充実感を与え、学習への意欲的な取り組みにもつながる可能性があると考えられることから、指導者は、適度な練習時間と学習の両立や健康面を考え、家庭学習時間と睡眠時間が十分とれる1日の生活計画表を作成して、家庭学習時間と睡眠時間を保障する必要がある。



図2 家庭学習と睡眠時間

6 外部指導者

(1) 指導資格の種類

外部指導者は、単に専門的スキルを有するだけでなく、日本体育協会が認定する公認スポーツ指導者の資格を有することが望ましい。その資格の種類は、スポーツリーダー、指導員、上級指導員、コーチ、上級コーチ、教師、上級教師に分けられそれぞれそのレベルに応じた専門的な知識と能力が身につけている。

(2) 公認スポーツ指導者（有資格者の導入）

「公認スポーツ指導者」は、スポーツ医・科学の知識を活かして、スポーツを「安全に、正しく、楽しく」指導し、その「本質的な楽しさ素晴らしさ」を伝えるため、スポーツに関する専門的な知識を取得した指導者である。外部指導者は、学校教育に対する理解があり、識見を備えている有資格者が望ましく、顧問と連携を密にして活動内容が常に把握できるようにすることである。外部指導者の導入については、全教職員の共通理解を図り、学校長の責任において依頼するようにする。外部指導者の中には、生徒の発育・発達の特徴をあまり考えずに、勝利至上主義的な考えで指導に当たることもある。その場合は、顧問だけでなく管理者も含めて外部指導者と十分話し合い、生徒の主体性を尊重した適切な活動を展開する必要がある。さらに、顧問の部活動に対する指導理念を十分理解して、生徒の指導に従事しなければならない。

V 指導の実際

1 生徒の実態把握

1年6組の学級の実態を観ると、男子20名、女子19名、合計39名中36名が部活動に所属し、日々の活動に励んでいる。その内訳は、男子バスケットが3名、男子テニス4名、男子ハンド3名、男子卓球2名、野球2名、男子サッカー1名、水泳1名、女子テニス8名、女子バドミントン3名、女子ハンド3名、女子バスケ1名、美術1名、吹奏楽4名、無所属3名である。このように全体の92%の生徒が部活動に所属している。

それぞれの部活動で身に付けたスキルを、「部活動から離れた学級集団の中で活用できないだろうか。」「日々の授業の中や学級活動で活用することで、授業態度の改善や学級の良い雰囲気づくりに活かすことが出来るのではないだろうか。」と思い、授業中にスキルの活用場面を設定することで、望ましい人間関係が築くことができ、学習意欲も高まり互いの学び合いや高め合いにつながって行くのではないかと考える。

2 部活動とソーシャルスキル

ソーシャルスキルとは、日常の社会生活の場面において、自分の置かれている現在の状況を察知し、こうするとどうなるだろうという予測をもとに、他者に不快感を与えたり迷惑をかけたりしないで、自分の感情をコントロールしながら、適切な自己表現をできるかという技能である。

ソーシャルスキルの定義はさまざま、ある特定のスキルを持っていて、それらのスキルを、どこで、いつ使うかを知っている人。特定のスキルとは、他者と適切な方法で効果的に接することを可能にする能力である。その能力とは、対人関係の目標を達成するために、言語的・非言語的な対人行動を適切かつ効果的に実行する能力である。とも記されている。

基本的なソーシャルスキルは、家庭生活を基盤とした躰によって自然と身につけていくものであるが、幼少期から人との接し方など、獲得しておくべきスキルを身につけていない生徒は、他者とのコミュニケーションがうまくとれず、学級での不適応につながることもある。

そこで、本研究では、原田教育研究所発行のBUKATUアンケートを活用し、今現在、部活動で身につけているソーシャルスキルを確認し、平均点数の高い生徒を学級のリーダーとして選出し、その身につけているスキルを学級の話し合いの中で活用させ、よりよい学級集団の雰囲気作りに役立てることで、落ち着いた雰囲気の中で学習する学習意欲のある学級に近づけたいと考える。

(1) 部活動の学習状況を把握できるBUKATSUアンケート実施

45問の質問項目があり、ひとつひとつが部活動における標準的な教育目標になっていて、生徒個人およびチーム全体の学習状況がわかり、全国水準と比較し、生徒の部活動での学習状況を把握することができる。5件法の尺度で、各下位尺度の得点分布範囲は下位のA～C、10の学習項目・評価観点項目に分けられている。

- ア 競技力・専門性・・・協議結果や競技力向上，専門性の向上や詳しくに関すること
- イ チームメイト・・・チームメイトから得ているプラス面に関連すること
- ウ 自律的行動・・・自ら定着させた，ルール規律に基づく行動や態度に関すること
- エ 精神的効果・・・精神の安定や楽しい気持ちに関連すること
- オ 有用な人物像・・・有用感や存在感の持てる人物像に関連すること
- カ 内面的成長・・・主体的に，継続的な努力をする自己の内面成長に関連すること
- キ 集団への貢献・・・自分が関係する集団への具体的な貢献に関連すること
- ク サポート・・・チームメイトへの具体的なサポートに関連すること
- ケ 雰囲気形成・・・チームにかかわる雰囲気形成に資する貢献に関連すること
- コ 心情面への配慮・・・チームメイトや関係者への心情面への配慮や態度に関連すること

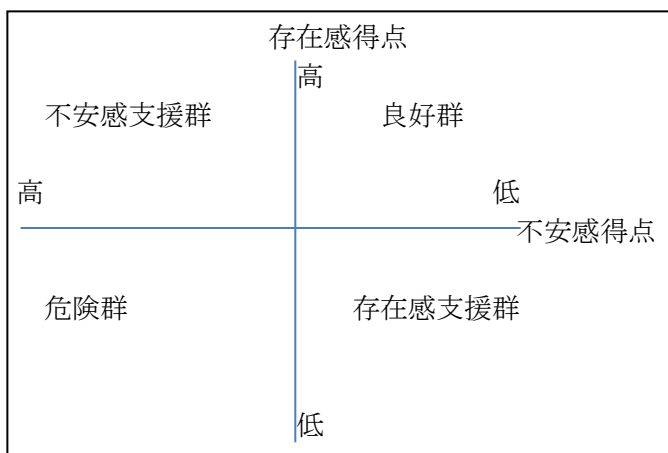


図3【部活動適応感アセスメント 4つの群】

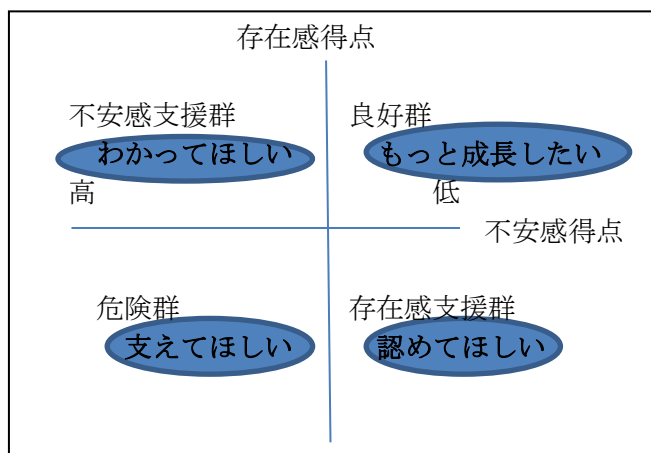


図4【個人について】

表4 部活アンケートの特徴

群の名前	特徴
良好群	存在感の得点が高く，不安得点が低い部員です。部活動内で自分の存在感や有用感を感じています。友人関係が良好で，自信を持って部活動に取り組んでいます。
存在感支援群	存在感得点・不安感得点ともに低い部員です。部活動内で認められたり，褒められたりする機会が少なく，部活動へのやる気など自主的な気持ちが低い状態です。いじめや悪ふざけを受けている可能性は，低いと考えられます。
不安感支援群	存在感得点・不安感得点ともに高い部員です。部活動には意欲的に取り組んでいます，友人関係などでトラブルを抱えていることが多く，周囲とうまくいかないといった場面が見られる部員です。実際にいじめなどの被害を受けている可能性があります。
危険群	存在感得点が低く，不安感得点が高い部員です。部活動内で大変強い不安感を持っていて，部活動参加に苦痛を感じています。欠席が目立ったり，退部を考えたりしている状態で，耐えられないいじめの被害にあっている可能性があります。

- ・【理想型】・・・仲間意識が強く，チームに活気がある。お互い認め合い，高め合う。
- ・【きっちり型】・・・ルールや練習方法が確立し，成果に対する意識が高い。
- ・【ゆるみ型】・・・関わりの機会が多く，一人一人が尊重されている。(ルールや練習方法があいまい)
- ・【二極型】・・・成長のチャンスが沢山ある。少し変えれば，大きく変わる。
- ・【くずれ型】・・・未成熟なチーム良いチームとなるための対策が沢山ある。(専門家サポートが必要)

主に有形的なこと	
<p>(キ) <u>集団への貢献</u></p> <ul style="list-style-type: none"> 自分が関係する集団への具体的な貢献 <p>(ク) <u>サポート</u></p> <ul style="list-style-type: none"> チームメートへの具体的なサポート 	<p>(ア) <u>競技力・専門性</u></p> <ul style="list-style-type: none"> 競技結果や競技力向上 専門性の向上や詳しさ <p>(イ) <u>チームメート</u></p> <ul style="list-style-type: none"> チームメートから得ているプラス面 <p>(ウ) <u>自律的行動</u></p> <ul style="list-style-type: none"> 自ら定着させたルール・規律に基づく行動や態度
主に自分以外のこと	主に自分のこと
<p>(ケ) <u>雰囲気形成</u></p> <ul style="list-style-type: none"> チームの雰囲気形成や関係者の心情への寄与 <p>(コ) <u>心情面への配慮</u></p> <ul style="list-style-type: none"> チームメートや関係者への心情面への配慮や態度 	<p>(エ) <u>精神的効果</u></p> <ul style="list-style-type: none"> 精神の安定や楽しい気持ち <p>(オ) <u>有用な人物像</u></p> <ul style="list-style-type: none"> 有用感や存在感の持てる人物像 <p>(カ) <u>内面的成長</u></p> <ul style="list-style-type: none"> 主体的に継続的な努力をする自己の内面的成長
主に無形的なこと	

図5 カテゴリー

(2) リーダーの選出

部活動アンケートにより、男子4名、女子4名、合計8名のリーダーを選出した。男子2名と女子2名、計4名は、1学期（4月～10月）まで、学級役員を務めた生徒で、他の男子2名と女子2名、計4名は、部活アンケートで高い得点結果が出ており、積極的に部活動に励んでいる生徒である。

「自分に関する有形的な（見えやすい）こと」「自分に対して無形的な（見えにくい）こと」「他者に関する有形的な（見えやすい）こと」「他者に関する無形的な（見えにくい）こと」のすべての項目において、男子No.17（水泳部）、女子No.31（吹奏楽部）、女子No.46（吹奏楽部）の3名の生徒が高得点になった。また、男子No.10（吹奏楽部）、女子No.49（女子バドミントン部）は、得点結果は低いですが1学期の学級長と副学級長を務めていることから、学級の中心リーダーである。以上の合計8名のリーダーを学級活動の中心とした授業の展開を考えている。

表5 リーダーの得点

No.	性別	自分・有形的	自分・無形的	他者・有形的	他者・無形的	合計
1	男	48	38	32	30	148
9	男	51	48	35	38	172
10	男	38	28	16	25	107
17	男	64	50	40	43	197
31	女	57	48	42	45	192
41	女	53	45	37	44	179
46	女	59	53	46	47	205
49	女	42	30	19	36	127
平均		46	38	30	35	148.8

(3) 学級満足度

河村茂雄(2003)の調査によると、ソーシャルスキルと学級適応との関係は「配慮のスキル」と「かかわりのスキル」の2つのソーシャルスキルが、関係していることが明らかになった。中学校には、「配慮のスキル」と「かかわりのスキル」の両方が活用されていることが前提の上で、中でも「かかわりのスキル」が活用されることが学級適応には欠かせない条件ではないかと考えられた。人とのかかわり方、友人関係の持ち方について生徒たちに共通する部分は、ルールとマナーがあげられる。ルールは、生徒同士の対人関係を建設的に促進するものである。互いに傷つくことなく、より対人関係を広め深めることができる。人々の集まりが「集団」になるためには、ルールが確立していることが重要である。したがって、学級内で互いに関わり合うためのルールがどの程度確立しているか、これは学級をまとめるうえでも、心の教育を進めていくうえでも、とても重要なことである。かかわり合いにおいて、生徒たちがどれくらいルールを意識して行動しているかである。必要なルールの把握の方法として、「学校生活で必要とされるソーシャルスキル尺度」である。この尺度は、学校生活を良好に送るためのソーシャルスキルのポイントをまとめたものである。学級の平均値が学級に確立されているルールの目安になるのである。「配慮のスキル」は対人関係を営むうえでのマナーである。自他の人権を尊重する姿勢が行動レベルで実行されたものである。「かかわりのスキル」は友人と能動的にかかわるのに必要なスキルである。この2領域がバランスよく活用されていることが大事である。

生徒が学級生活に高い満足感をもっている学級では、

「配慮のスキル」と「かかわりのスキルの得点が、全体の平均値よりもかなり高いことが示されている。逆に、生徒が学級生活に満足していない学級では、両者の得点は全体の平均値よりもかなり低い。特に学級崩壊の兆候を示している学級ではその傾向が高く、また、「配慮スキル」の得点が極めて低い生徒がリーダー的な存在にある場合もみられる。「配慮のスキル」と「かかわりのスキル」それぞれの得点の高さのバランスが大切で、とくに「配慮のスキル」よりも「かかわりのスキル」のレベルが高くなっている場合は、相手に対する配慮よりもかかわりが過剰になっているわけだから、トラブルが生じる可能性が高くなる。一方、「配慮のスキル」と「かかわりのスキル」が高い学級ではルールが生徒にしっかりと共有され、そのうえで交流が深まる。したがって、良いリレーションが形成され、その結果、学級満足度も高くなるのである。また、学級のリーダーになる生徒の、個人得点にも注意する必要がある。

表6 リーダーの得点

No.	性別	配慮		かかわり	
1	男	50	B	48	B
9	男	52	A	35	D
10	男	53	A	36	D
17	男	49	B	46	C
31	女	54	A	38	D
41	女	50	B	42	C
46	女	50	B	45	C
49	女	50	B	54	A
	平均	42		38	

(4) スクール・モラル尺度

スクール・モラルとは、学校の集団生活ないし諸活動に対する帰属度、満足度、依存度、などを要因とする生徒の個人的・主観的な心理状態である。したがって、生徒のスクール・モラルは学校生活への適応の指標になるものである。そして、中学生のスクール・モラルを規定する要因として、学校への関心、級友との関係、学習への意欲、教師への態度、テストへの反応、進路への見通し、の6つがあることを指摘している。河村(1999)は中学生の援助ニーズの段階を把握した後、具体的な援助を必要とする領域を把握するスクール・モラル尺度を開発した。これは、学校生活への満足度や充実感を感じる内容を領域別に実態調査をして整理し、それについて中学生5000人の解答結果をもとに作成されたものである。具体的には、①友人との関係、②学習意欲、③教師との関係、④学級との関係、⑤進路意識、⑥テストへの反応、⑦寄贈への態度、⑧特別活動への態度、⑨その他、の9つがスクール・モラルを規定する領域として想定され、分析の結果、「友人との関係」「学習意欲」「教師との関係」「学級との関係」「進路意識」の5つが特定されたものである。それに加え、放課後の活動である「部活動との関係」も含まれる。5件法の尺度で、各下位尺度の得点分布範囲は4点から20点である。得点が高いほどその領域のモラルが高いと判断される。さらに、スクール・モラル尺度(中学生用)は、河村(1999)が作成した中学生の適応に関する援助ニーズの段階を把握する学級生活満足度尺度の結果とも、高い相関があることが確認されている。

(5) アサーション

「自分も相手も大切にしようとする自己表現で、自分の意見、考え、気持ち、欲求などを、正直に率直にその場にふさわしい方法で述べることであり、また同時に、相手が同じように表現することを持つ態度を伴う」ものである。言い換えると「相互の関係性を大切にしたい自己尊重のコミュニケーション」ということができる。学校では、話し合いのスキルの向上などにアサーションが認められ、教師自らがアサーティブな表現能力を身につけると同時に、生徒たちにさわやかな自己表現能力を伝えることが大切である。アサーションは、人と人とのあり方、また、自分自身の身体感覚や内面の声も大切にしながら他者と交流する必要がある。そこには悪い面、攻撃性、暴力性などに気づく場合がある。アサーションの考え方をすることは、生徒にとって、他者と共同しつつ、自分をつくっていく際の、指針としての意義をもつと考えられる。

① 攻撃的な自己表現

自分のことは大切にすることが相手のことを無視したり、軽視したり相手を大切にしない自己表現である。自分の考えや意見、それに気持ちをはっきりと言い、自分の権利を主張する。しかし、相手の考えや意見、それに気持ちは無視したり、あるいは軽視したりするため、一方的で相手に押しつけた言い方となる。また、相手の気持ちや欲求を巧みに相手におしついたり、相手を操作して思い通りに動かそうとしたりする。口では「はい、はい」と言って行動しなかったり、聞く耳を持たない態度も含まれる。自己肯定・他者否定の話し方である。攻撃的な人は、相手が自分と違うことへの不安、相手に逆らわれることへの恐れ、相手ときちんと話ができない不器用さなども抱えていることが多い。相手との相互尊重ができない人間関係のため、関係が長続きしない場合がある。「非主張的」がたまって「攻撃的」になることもある。また、力関係が違う場合は、静かに話しても「攻撃的」になることがある。

② 非主張的な自己表現

相手のことは大切にすることが、自分を大切にしない自己表現のことである。もめ事や葛藤を避け、その場を納めるには好都合かもしれないが、不十分な自己表現ともいえる。自分の気持ちや考え、信念を表現しなかったり、主張しなかったりするために、自分で自分を踏みにじむ結果になる。

また、遠回しに言ったり、聞こえないように小さい声で言ったりすることも含まれる。相手を尊重しているようで、相手に率直でなく、自分に不誠実な行動であるともとらえられる。非主張的な表現は、相手に自分の考えや気持ちを伝えられなかったという不完全さや後味の悪さを体験し、欲求不満やストレスがたまってイライラしたり落ち込んだり、憂鬱になったりする。自己否定・他者肯定の話し方である。

③ アサーティブな自己表現

自分も相手も大切にしたい自己表現である。自分の考えや意見、それに気持ちや信念を率直に正直にその場にふさわしい方法で自己表現する。自己信頼や相互信頼の上に成り立つコミュニケーションである。お互いの意見や気持ちの違いによる葛藤がおこることを予想し、葛藤が起きてもそれを自分で受け入れ、お互い歩み寄って解決していこうとする。自己肯定・他者肯定の話し方である。自分の気持ちがわからないとできない。また、いつでも、どこでもできるわけではなく、余裕がないとなかなかできないものであり、忙しさに追われていると「アサーティブ」になりづらいこともある。アサーティブになれない理由として、次のようなことがある。

ア、自分自身の気持ちに気づかない。

イ、結果を気にし過ぎる。

ウ、葛藤を恐れる。

エ、間違った「思い込み」を持っている。

オ、アサーションのスキルを学んでいない。等がある。

エの「思い込み」は、「非合理的な思い込み」とも呼ばれ、現実的でないにもかかわらず、当然の事のように受け取っている生徒も多い。このような思い込みで相手を大切に出来なくなっていないかどうか検討しながら、オのアサーションのスキルを学ぶ機会を設定して、人間関係の向上に近づけていく事が不可欠である。

VI 検証授業

学級活動指導案

日時：平成26年2月5日（水） 第4校時

学級：宜野湾市立嘉数中学校1年6組

男子19名女子19名 計38名

指導者：金城 力

外部講師：吉田 浩之

研修係長：知念 克治

1 題材：自分を知る、友だちを知る。『友だちのよいところを探そう』

2 生徒の実態と題材について

(1) 生徒実態

学習意欲を高めるには、授業の展開を工夫したり興味・関心をひくような教材・教具の活用など、教師の教材研究は不可欠である。同様に生徒が、自ら学ぶ意欲を育てるためには「他者受容感」や「有能感」そして「自己決定感」を高めることが重要であることから、心的エネルギーが湧いてくるような状況を、教室内に作ることが、学習意欲の土台になると考える。

生徒が、高い満足感をもっている学級では学級満足度尺度による「配慮のスキル」と「かかわりのスキル」の得点平均が高くなる。そこで、部活動で身につけているソーシャルスキルを、学級のリーダーたちが学級における話し合いの中で上手く活用し良好な人間関係を構築する手法として、身につけていくことで、互いのかかわり合いが深まり、学級満足度も向上すると考える。

本学級の生徒が、9月に実施した事前調査によると、「配慮のスキル」の学級平均が45点で平均値を示した。「かかわりのスキル」の学級平均は39点で、やや低いを示し、「配慮のスキル」の得点が高いことがわかった。また、スクール・モラル尺度の満足度は「友人との関係」16点（全国平均16.5）、「学習意欲」14点（全国平均14）、「教師との関係」9点（全国平均12.6）、「学級との関係」13点（全国平均14.5）、「進路意識」13点（全国平均14.2）という数値を示した。「友人との関係」「学習意欲」の得点平均が高いことから、人間関係を大切し、学習意欲に対しても意識が高いと考えられる。

(2) 題材設定の理由

生徒は、期待や不安を抱いて中学校へ入学し新しい環境へ入ってくる。本校は3つの小学校から生徒が入学してくることもあり、様々な不安を抱いている。このような実態に加え、生徒会活動や部活動があり、異年齢集団との交流も多くなる。中1ギャップによる学校不適應への対策として、5月には学年単位による「校外学習・春の遠足」や6月には、異年齢集団による「地区中体連への参加」、7月には、学級対抗の「校内陸上競技大会」など、いろいろな行事を通して、人間関係作りやコミュニケーション能力を培ってきた。そこで身につけたソーシャルスキルは、今後の学校生活を楽しく送ることができるためには大切である。自分自身に自信を持ち学校生活を送れることは、学校不適應への改善と考える。

自尊感情は、学校への適応や対人関係に望ましい影響を及ぼすと言われている。自尊感情が低いと否定的な感情を持ち、学級での不適應に至ったり、対人関係に支障を来したりする。逆に自尊感情が高いと、肯定的な感情を持ち、対人関係も高まってくる。自分の短所だけではなく、長所についても目を向ける習慣を身につけさせるためにも、他者からのアドバイスをもらい、新たな自分の一面を発見させることが大切である。また、他者の長所を探すことで互いの個性を理解し合い、人間関係も良好になっていくと考える。一方、少数ではあるが非合理的な思い込みをして、おかしな受け取り方をする生徒もいる。理想と現実のギャップに悩んだり、他人の目を意識して人と異なることへの不安を抱いたり、自分に自信が持てず目標を見つけることができないこともある。そのような生徒が、自分のよさを見出しアクティブな自己表現を身につけ、それを他者とのコミュニケーションの場で活用することで、学校生活に自信がもて楽しく学習活動に取り組むことができると考えて、本題材を設定した。

3 事前の活動

表7 事前の取組

No.	項目	対象	時間	ねらい	備考
1	BUKATSU アンケート	学級全体	学活	全体の雰囲気や人間関係の状況を知る。	
2	学級満足度アンケート	学級全体	短学活	「配慮」「かかわり」のスキルの状況を知る	
3	スクール・モラールアンケート	学級全体	短学活	学級生活満足度の状況を知る	
4	『さわやか』さんになって話そう	学級全体	短学活	自分自身を見つめ、自分を大切にす気持を育てるとともに、自他尊重の表現を大切にしようとする態度を育てる。	
5	自分の考えや思いを友だちに伝えよう	学級全体	学活	自分の考えや思いを大切にし、相手にはっきりと伝えることの大切さを学ぶ	
6	さわやかなたのみ方を考えよう	学級全体	短学活	相手の気持ちや立場を考え、さわやかに頼む言い方を考える。	
7	さわやかな断り方を考えよう	学級全体	短学活	相手の頼み事を断る場合、相手の思いを大切にしつつ、自分の考えや思いを相手にはっきりと伝えることの大切さを学ぶ。	
8	さわやかに自分を表現しよう	学級全体	学活	3つの自己表現（攻撃的な自己表現、非主張的な自己表現、アサーティブな自己表現）の違いと特徴を理解する。	
9	あなたならどう言う	学級全体	短学活	日常生活の中でさまざまな問題に直面したとき、自分の考えや思いを相手にどう伝えるかを考え、相手を尊重しながら意思を伝える言い方を身につけ、問題を解決する力を培う。	
10	私は、どんな人	学級全体	短学活	自己理解を深めるとともに、自他からよいところを指摘してもらうことによって、自己効力感を高める。	
11	『アサーション』を知ろう	学級全体	学活	攻撃的、非主張的、アサーティブについて理解するとともに、自他を尊重する望ましい自己表現の在り方について考察する。	
12	自分のものの見方・考え方の傾向を知ろう	学級全体	短学活	非合理的な考え方について、自分のものの見方・考え方について知る。	
13	気持ちよい話合いをしよう	学級全体 個別	学活	学級の話合いの中で、意見をまとめる際、司会者としての表現方法について考える。	

4 本時の指導

(1) ねらい

「友だちのよいところ探し」を行うことで、互いの個性を認め合い、自分自身で気づけなかつたよいところを新たに見出し、それを伸ばそうと考える意欲を培う。

(2) 授業の仮説

自分のよいところを探してもらうことによって、他者の評価と自分の評価を比べてみて、自分自身が認知していたことと、他者が自分について認知していたことは同じではないことに気づき、新たに自分のよさを発見することで自尊感情が高まり、対人関係が良好になるであろう。

(3) 本時の展開

時間	学習活動	教師の指導・支援	学習評価
導入 (5分)	<p>本時の確認をする 「人の長所について考えてみよう」</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 10px auto;">自分のよいところをさがそう</div> <ul style="list-style-type: none"> ・キーワードをもとに自分のよいところを探し、ワークシートに記入する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・人には長所が必ずある。 ・1人、2つ以上記入させ自分自身について見つめさせる。 ・キーワードを掲示し自分のよいところを選ぶ。 ・教師が自己開示などをして安心させる 	◇一斉
展開① (15分)	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 10px auto;">友だちのよいところをさがそう</div> <ul style="list-style-type: none"> ・グループ学習の展開は、リーダーを中心に行う。 ・Aリーダー（男子バスケット部） Bリーダー（吹奏楽部） Cリーダー（水泳部） Dリーダー（吹奏楽部） ・友だちをよく見て、よいところを探すようにしてその理由も記入する。 ・友だちのよいところは、複数あることを強調しキーワードを参考にワークシートに記入する。 ・記入が終了したら、となりの生徒へワークシートを回す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・A～Dの4グループに分け、それぞれリーダーをおく。（4人のリーダーは事前に知らせておく） ・リーダーを中心にグループ活動ができているか確認する。 ・必要なときはリーダーに助言をする。 ・うまく探すことができない生徒には助言をしながら机間巡視 ・否定的なことが書かれていないかチェックする。 ・不快感を感じている生徒はいないか、よく観察する。 	◇グループ 【思・判・実】 <ul style="list-style-type: none"> ・リーダーの行動の様子 ・リーダー以外の生徒の様子 ・ワークシートの記述
展開② (15分)	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 10px auto;">この人は誰でしょう</div> <p>生徒司会者を置く。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・司会の生徒（女子バドミントン部） ・これから、クラスの仲間のよいところを発表するので、誰であるのかを当てる。 ・ゲームの内容、ルールを説明する。 ・正解してもらったワークシートは、本人へ返す。 ・振り返りカードの記入 	<ul style="list-style-type: none"> ・司会進行は、学級のリーダーに行わせる。 ・司会の指示に従うように一斉指導を行う ・司会はアサーティブな表現を意識させる ・各グループのリーダーと連携させる。 ・ゲーム感覚で楽しい雰囲気を保つ ・発表の仕方を説明するように指導する。 ・一人一人が発表できるように配慮するよう指導する。 	
展開③ (15分)	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 10px auto;">友だちが選んだよいところと自分で考えるよいところを照らし合わせ、感じたことや考えたことを発表する</div> <ul style="list-style-type: none"> ・ワークシートの記入。 ・全員が記入したことを確認し、内容を発表する。 ・友だちの発表を聞く。 ・発表の内容を聞き、自分の考えと他者の考えを比べお互いのよさについて話し合う。 ・発表者が新たな自分に気づくようにする。 ・友達のよさを知り、人間関係を深める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・振り返りワークシート記入させる。 ・発表者を指名する。 ・発表するときは、相手に伝わるように自信を持って発言する。 ・発表者の立場になって発表を聞く。 ・発表者の感想や反省に対して、自分の考えや気づいたことを出し合い、話し合いを深めていく。 	【思・判・実】 <ul style="list-style-type: none"> ・行動の様子 ・生徒の発表の様子、聞く態度 ・ワークシートの記述 ・自分のよさを認める ・新たな自分を発見する
まとめ (5分)	<ul style="list-style-type: none"> ・残りの学校生活について、考える。 ・個人目標を立てられるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分と友だちのよいところを知り、お互いに認め合うことで、これから残された学校生活の目標が立てられると良いと思います。お互いの個性を尊重し、居心地の良い学級にしましょう。 	

図5 本時の展開図

(4) 評価

- ・友だちのよさを振り返る活動を通して、友だちのよさと自分のよさを認めることができる。
- ・よさを認める大切さに気付き、新しい人間関係を築く前向きな態度を持つことができる。
- ・自分のよさを発見し、さらに自分のよさを伸ばす目標を考えることができる。

5 事後の活動

表8 事後の取組

日 時	生徒の活動	教師の指導・支援
2/6(木)	学校生活の個人目標を決定しよう	残りの学校生活を大切にする態度
2/7(金)	期末試験に向けた取り組み計画	1学年最後の試験にベストを尽くす
2/10(月)	BUKATSUアンケートの実施	退部した生徒との確認する
2/12(水)	学級満足度アンケートの実施	真面目に取り組んでいるか確認する
2/14(金)	スクール・モラルアンケートの実施	真面目に取り組んでいるか確認する

6 検証授業の記録

《授業者の反省》

・事前の取り組みで

良好な人間関係を向上するにはアサーティブな表現の大切さをロールプレイによって実感させ表現方法の学習をした。その後、物事を考えるときは非合理的な考え（思い込み）が強い生徒に対して（真面目な生徒に多い）もっと気軽に考えて良いことに気付かせた。そして、今の自分の姿を見つめさせるために「私はどんな人」自分自信のアピール項目を20個ほど書き出すことで、自分について改めて考えさせ本時の授業を迎えた。

・本時の授業

時間配分が上手くできなかった。「自分のよさをかこう」で予想以上に時間が超過し、最後のまとめで時間がなくなった。生徒たちは、自分自身のよさについて書き出すことが予想以上に、難しく考えていることに気づいた。よって、導入の意識付けには中学生の実生活に近い題材を使用し、もっと書きやすくなるような意識付けが必要に思いその後の展開では、リーダーを中心にグループで助け合いながら活動していたので良かったと思う。特に、手助けが必要な男子生徒に対して、グループのリーダーがその生徒の座席まで行って、寄り添いながら丁寧に助言していた姿が見れたのは、新たな発見であった。また、ゲーム形式で「この人は誰」クイズが楽しく行えたので良かったと思う。生徒は、教師の存在を気にすることなく、リーダーの指示にしたがって進めていて、互いのルールが守れる場面も見られた。

授業のまとめの時間をもっと確保し、その発表の中で他者から見られている自分と、今までそう見られているであろう自分とのギャップについて、話し合わせてお互いのよさをもっと深めて互いに認め合う場面を設定したかった。（時間の配分とまとめの深め方は、今後の課題としたい。）

《野原信哉先生》

- ・クイズ形式の授業形態だったので、全員が楽しく参加している感じがした。
- ・グループのリーダーが席を移動して、他の生徒に気づかいているところが良かった。
- ・この後の給食時間など、本音を話せる時間の様子も見てみたい。
- ・「ナルシ」や「カマチョ」と出た言葉は、長所をあげる点では良かったことなのか、疑問であった。

《榮努先生》

- ・「自分のよさをかこう」が超過することは、小学校でも良くある。子どもたちは他人のことは意外とスラスラ書けるが、自分のことになると書きにくそうである。その多くの子どもたちは、自分自身に劣等感を持っているのではないか。
- ・劣等感を持っている子どもたちに対する指導方法としては、ワークシートを個人に戻したときに、お



互いの理解合いが生まれるのではないかと思った。そのときに子どもたちの話し合いをさせると良い。

- ・発表の形態は、小集団のグループの中で発表会を行うと、もっと多くの子どもたちの発表の機会が増え、話し合い活動が活発になる。
- ・導入は生徒の身近なもの例えば、友達・家族・身内にしてみると親密感がありイメージしやすかった。《知念克治指導係長》

・自分のよいところは、1つでも良かったと思う。書きにくそうにしていた理由としては、他人に見られるのではずかしいと言うことがブレーキになっていたのではないか。

・友達の良いところを書く場面では、同じ言葉を書かないように指示するか、ワークシートに記すことでいろいろな良いところが出てくる。

・授業の大切なところは、自分に落とすところなので自分自身を考えさせる場面を深める必要があった。

・教師の出番を授業の中で、もっと入れるべきであった。具体的には、Cグループが一度も発表点がもらえなかった場面や顔が赤面した女子がいた場面など。

・生徒の感想発表のときの女子生徒1人、男子生徒1人の発表内容を教師が取り上げ、全生徒へ投げかけて、話し合いのケースにして、みんなで深め合うことができれば、もっと良い授業になると思う。

・教師のまとめの言葉を、教師が決めた言葉ではなく、生徒たちから導き出した言葉で教師のまとめを行うと生徒たちは授業を終えた達成感が高まる。

《知念春美所長》

・学級の掲示物に担任の思いと育てたい生徒像があらわれていたので良かった。

・生徒たちの声を拾い上げると、生徒と教師の信頼関係があることを感じた。

・一斉、グループ、一斉という授業形態は、授業参観するとわかるが指導案でもわかるように、本時の展開の中に入れていく必要がある。特にグループ学習の大切さなども付け加えると良い。

・時間配分について、導入10分、展開の前半19分・展開の後半14分、生徒の感想記入4分、発表3分、教師のまとめ2分という配分であった。授業のポイントの自分に落とすところにもっと時間をたっぷり取り、考えさせる必要があった。方法として導入は5分に絞り、メリハリをつけることだ。

・発表の仕方で、教師が「発表したい生徒」と聞いても誰も手を挙げない場面は良くある。良い方法として「発表できない生徒、手を挙げて」と聞いて手を挙げた生徒にその理由を聞き、その問題を解消し、みんなを安心させて発表者を決めると、全員が賛同して良い発表ができる。発表する勇気、力をつけさせることは教師力でもあり、授業工夫の1つとして手法を身につけて欲しい。

・グループでの発表を、全体からではなく小集団・グループ内で行って後に全体にもっていくと更に高まってくる。

・リーダーたちの部活動で身につけているソーシャルスキルを指導案の中に入れていくと良い。

・良かった点は、自分自身に自信を持たせる内容。教師の表情。司会の生徒がとても明るく笑顔で進行していたことだ。

《宮里教頭指導助言》

・特別活動・学級活動の目標に沿った授業内容であった。2・学級活動の内容(1)ア～ウ、(2)イ～オまで授業展開の中に入っていた。特に、自尊感情を高める内容であったので良かったと思う。

・リーダーを中心とした学級作り、話し合いや発表活動になっていて、楽しい雰囲気で行えたことは良かった。

・リーダーがしっかりしていた。そのリーダーの育成は部活動も同様に重要だと感じた。

・教師が話しすぎない、教えすぎないところがリーダーの育成にもつながっていると思う。

・評価についても、評価規準に沿っていたので良かったと思う。

・アドバイスとして、個人用ワークシートの名前の側に顔写真をのせると、もっとその生徒に対しての具体的な内容が書きやすくなるので、活発な発表に結びつくと思う。



VII 仮説の検証

本研究の仮説を「学級活動の場において、部活動で身につけているソーシャルスキルを積極的に活用し、互いの個性を認め合う、良好な人間関係が保たれることで、学校生活に活気が生まれ、学習意欲の向上した望ましい学級集団が築かれるであろう。」として研究を進めてきた。学級は1年6組男子20名女子19名、計39名である。その92%の生徒たちが13団体の部活動に、それぞれ所属している。部活動で身につけているソーシャルスキルをBUKATSU アンケートを実施して実態把握をし、得点の高い生徒をリーダーとして選出した。仮説の「互いの個性」とは、生徒の長所・良いところに絞った。検証授業において「友達の良いところ探し」を行い、その内容をアサーティブな表現で他者に伝えることで互いの人間関係が良好になり、学級の良い雰囲気が保たれることをねらいとした。

1 アンケート及びワークシートによる検証

尺度として活用したものが、学級満足度とスクール・モラルである。検証授業前の9月と検証授業後の2月の調査の得点を比較し、変容を検証していく。

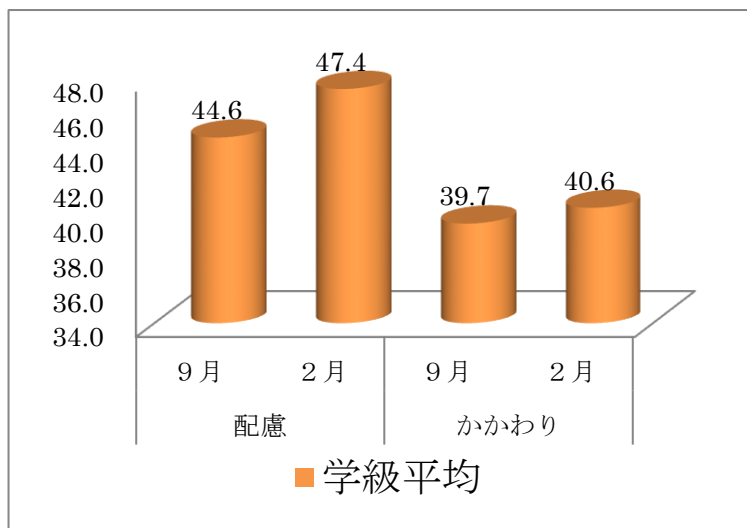
表9 日常の行動を振り返るアンケート

項 目	4	3	2	1
1 友達のまじめな話は、ひやかさないで聞いていますか。	65%	30%	5%	0
2 班活動で友だちが一生懸命やって失敗したときは、ゆるしていますか。	65%	35%	0	0
3 みんなで決めたことは、したがついていますか。	62%	30%	8%	0
4 友達の秘密はだまっていますか。	89%	11%	0	0
5 友達の気持ちを考えながら話をしていますか。	46%	46%	5%	3%
6 何かを頼んだりするとき、相手に迷惑がかからないか考えていますか。	57%	40%	3%	0
7 自分がしてもらいたいことを、友達にしてあげていますか。	46%	46%	8%	0
8 みんなと同じくらい話をしていますか。	57%	40%	3%	0
9 うれしいときは、笑顔やガッツポーズなどの身振りで気持ちを表していますか。	33%	44%	20%	3%
10 自分から友達を遊びにさそっていますか。	51%	35%	14%	0
11 困っているときに、友達に「手伝ってほしい」とお願いしていますか。	68%	32%	0	0
12 みんなのためになることは、自分で見つけて実行していますか。	49%	43%	8%	0
13 友達の中心となって、何をして遊ぶかアイデアを出していますか。	57%	38%	5%	0
14 自分だけ意見が違って、自分の意見を言っていますか。	78%	17%	5%	0
15 友達が話しているときは、その話を最後まで聞いていますか。	43%	43%	11%	3%
16 友達同士でいて、腹が立っても「カーッ」とした態度をとらないでいますか。	49%	32%	11%	8%
17 自分の係の仕事は、最後までやりとげていますか。	41%	41%	14%	4%
18 友達との約束は守っていますか。	35%	51%	14%	0
19 相手が傷つかないように話をしていますか。	30%	57%	8%	5%
20 友達とケンカをしたときに、自分にも悪いところがないか考えていますか。	24%	49%	19%	8%
21 友達が悩みを話してきたら、じっくり聞いてあげていますか。	16%	54%	22%	8%
22 相手の聞こえるような声で話していますか。	59%	38%	3%	0
23 面白いときは、声を出して笑っていますか。	73%	21%	3%	3%
24 初めて会った人でも話をしていますか。	41%	35%	14%	10%
25 わからないことがあるとき、友達や先生に聞いていますか。	41%	41%	15%	3%
26 友達が楽しんでいるときに、もっと楽しくなるよう、盛り上げていますか。	24%	60%	16%	0
27 係の仕事をするとき、何をどうやったらよいか意見を言っていますか。	14%	49%	30%	8%
28 ほかにの人に左右されないで、自分の考えで行動しますか。	30%	51%	16%	3%

4:いつもしている 3:ときどきしている 2:あまりしていない 1:ほとんどしていない

(1) 学級満足度

ソーシャルスキルアンケートの結果から学級平均値を見ると、配慮のスキルは 1.2 ポイント、かかわりのスキルは 0.9 ポイント上がった。配慮のスキルもかかわりのスキルともに、良好レベルに到達させたい。事前の取り組みで、「思い込み」と「アサーティブに自己主張する」ことを学習した。学級活動の中で意識して行動することで、良好な人間関係を築くことができ、クラスの雰囲気も良くなった。生徒たちが居心地の良さを感じたことが、学級に対する満足度が向上したと推察される。



目安となる得点			
〈配慮のスキル〉		〈かかわりのスキル〉	
●とても良好	52点以上	●とても良好	51点以上
●良好	49～52点	●良好	47～51点
●平均的	43～49点	●平均的	39～47点
●やや低い	39～43点	●やや低い	35～39点
●かなり低い	39点未満	●かなり低い	35点未満

図6 学級満足度尺度

表 10 スクール・モラル

項 目		5	4	3	2	1
友人との関係	学級内には、いろいろな活動やおしゃべりをさそってくれる友人がいる	68%	24%	8%	0	0
	学級内に気軽に話せる友人がいる	81%	16%	3%	0	0
	人と仲良くしたり友人関係をよくする方法を知っている	19%	35%	35%	8%	3%
	友人とのつきあいは自分の成長にとって大切だと思う	54%	30%	16%	0	0
学習意欲	学校の勉強には自分から自主的に取り組んでいる	24%	24%	32%	17%	3%
	学校の勉強の中で、得意な教科や好きな教科がある	65%	19%	8%	3%	5%
	授業の内容は理解できている	11%	38%	32%	11%	8%
	学習内容をより理解するための、自分なりの学習の仕方がある	22%	21%	35%	14%	8%
教師との関係	学校内に、自分の悩みを相談できる先生がいる	22%	5%	14%	8%	51%
	学校内には、気軽によく話をする先生がいる	25%	16%	24%	11%	24%
	担任の先生とは、うまくいっていると思う	5%	5%	22%	11%	57%
	先生の前でも、自分らしくふるまっている	24%	22%	38%	5%	11%
学級との関係	自分のクラスは、仲のよいクラスだと思う	30%	35%	22%	5%	8%
	クラスの中にいると、ホットしたり、明るい気分になる	22%	24%	35%	8%	11%
	クラスで行事に参加したり、活動するのは楽しい	35%	22%	27%	5%	11%
	自分のクラスの活動に、貢献していると思う	19%	22%	41%	8%	10%
進路意識	私(僕)には、なりたい職業や興味のある職業がある	51%	10%	27%	6%	6%
	私(僕)には、自分の将来や夢に希望を持っている	49%	16%	27%	5%	3%
	自分の進みたい職業の分野については、自分から調べている	23%	24%	30%	14%	9%
	進路について仲のよい友達などと、話し合うことがある	32%	14%	32%	14%	8%
部活との関係	部活動には、自主的に参加している	51%	8%	22%	3%	16%
	所属している部活動は、仲のよい楽しい集団である	35%	24%	22%	0	19%
	所属している部活動は、希望していた部活動である	49%	19%	14%	3%	15%
	自分は部活動の中で、存在感があると思う	16%	16%	43%	3%	22%
5・・・とても思う 4・・・思う 3・・・どちらとも言えない 2・・・思わない 1・・・全然思わない						

(2) 友人との関係

16.5から17.4と0.9ポイント上がったが、項目別で見ると「人と仲良くなり、友人関係をよくする方法を知っている」で全体の47%が低い点数を示した。また、検証授業後の振り返りシートの感想にも「友人関係を良くする方法を知らないなので、もっと今日のような授業を受けて、友人関係を良くする方法を身につけたい。」と記入した生徒が5名ほどいた。このような感想を記入した生徒は、おとなしく内気な生徒が多いことから、今後の活動で教師から意図的なアプローチを行い小集団のリーダーとして活躍させ、対人関係に自信を持たせていく必要がある。

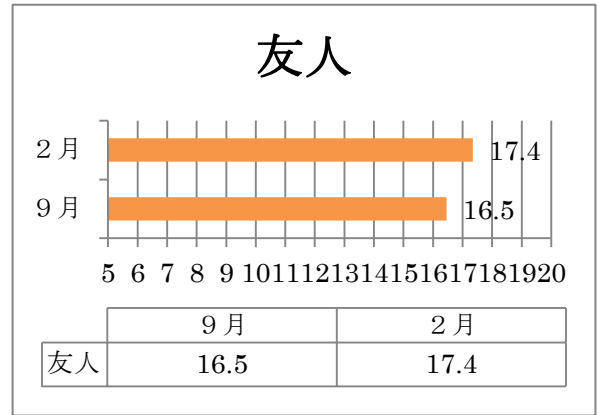


図7 友人との関係

(3) 学習意欲

学習意欲が0.9ポイント上がった。『国立政策研究所の学習意欲の調査研究』によると「授業がよく分かるとき」「授業がおもしろいとき」に生徒の学習意欲が高まることが分かっている。事前の取組の中で「アサーションを理解し活用する。」「非合理的な考え方。」を学習したことにより、友人と気軽に話し合いをすることができるようになり、互いの学び合い活動が積極的になったのではないかと考える。よって学習意欲も向上している。

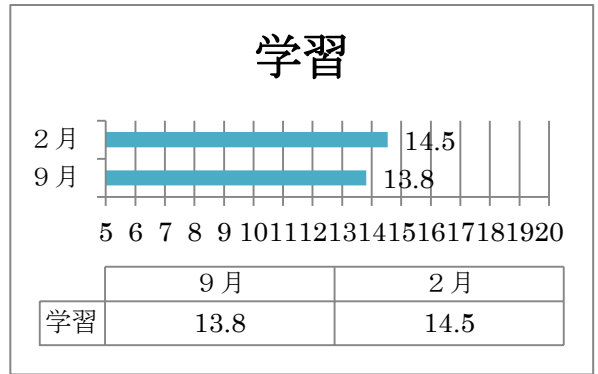


図8 学習意欲

(4) 教師との関係

1.5ポイント上がったが、全国平均と比較すると低い数値である。項目別で見ると「学校内に、自分の悩みを相談できる先生がいる。」「担任の先生とは、うまくいっていると思う。」でかなり低い数値を示した。今回の検証は、友人や学級との関係を構築する事に重きを設定し、事前の取組と検証授業を行った為だと考える。教師との人間関係の向上も考慮した活動計画が必要と考える。

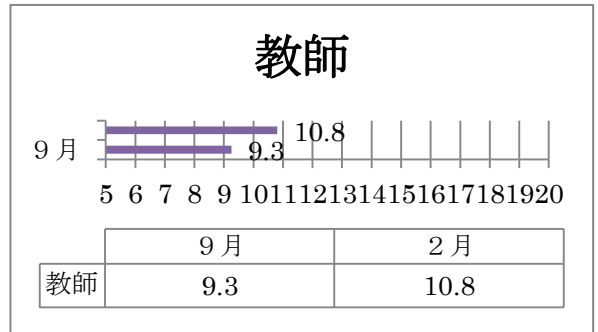


図9 教師との関係

(5) 学級との関係

0.7ポイント上がった。項目別でみると「自分のクラスは、仲の良いクラスだと思う。」「クラスの中にいるとホットしたり、明るい気分になる」では、上位層と下位層に分かれ、リーダーと対人関係が苦手な生徒も上位と下位に分かれる結果となった。全体的には向上したが、学級内には良いクラスではないと感じている生徒もいることが分かった。その生徒に対して個人面談等をおこない原因を確認して問題を解決しなければならない。

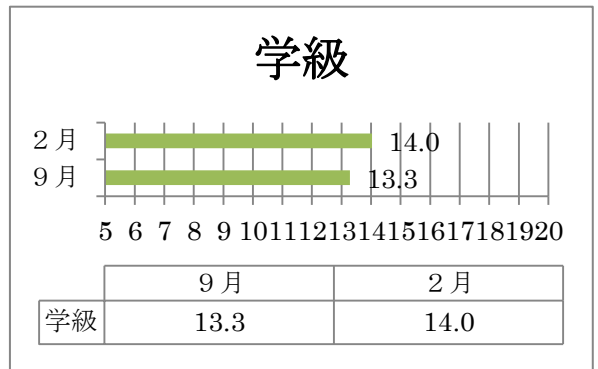


図10 学級との関係

(6) 進路意識

1.4ポイント上がった。進路意識が向上した理由として、生徒が、これからの生き方を考えて学校生活を送るためには、友人との情報交換など進路に対する話し合いの中で、互いの考え方を伝え合うことの必要性に気づき、クラスの間人間関係を深めることで進路意識も高まった。そして、進路意識を高めることで、学習意欲の向上にもつながると考える。

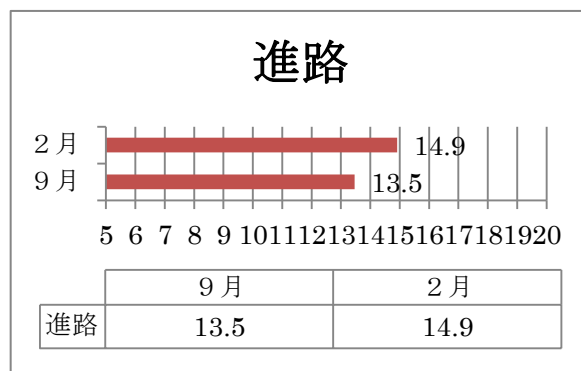


図 11 進路意識

(7) 部活動との関係

「部活動には積極的に参加している」「所属している部活動は希望していた部活動である」については約50%の生徒が、とても思うと解答していることから、自分の好む部活動に所属していることが分かる。一方「所属している部活動は仲の良い楽しい集団である」「自分は部活動の中で存在感があると思う」では、全く思わないと解答した生徒が約20%いる。その生徒たちは、所属している部活動に満足していないことが分かる。

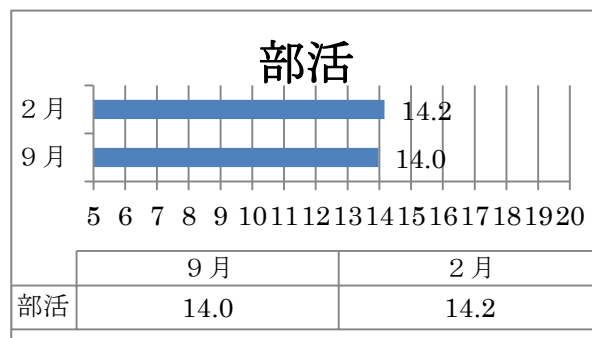


図 12 部活動との関係

Ⅷ 研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

- (1) 学級満足度には「友人との関係」「教師との関係」「学級との関係」など人とのかかわりに大きく関連があることが分かった。
- (2) 人間関係の形成能力を高める活動を計画的に実施すれば、グループ活動もスムーズに行うことができるようになり、自尊感情も高まることが分かった。
- (3) 部活動への満足感が高い生徒は、学校生活全体への満足感も高く積極的な学習活動につながっていくことが分かった。
- (4) 部活動で身につけたソーシャルスキルは、教科学習の動機付けになり学習意欲が向上するきっかけになることが分かった。

2 今後の課題

- (1) 良好な人間関係を築くためには、自己理解と他者理解を同時に行なう必要がある。そのためには、特別活動の時間だけではなく、道徳教育の時間「主として自分自身のこと」・自主、自立、誠実と責任、・向上心、個性の伸長、・強い意志、「主として他人とのかかわり」・人間愛、感謝と思いやり、・友情と信頼、・広い心、の内容項目も関連付けながら学級活動を展開することで、良好な人間関係を築くための授業実践が有効になる。
- (2) 自尊感情を高めるためには、アサーティブな表現方法を学習させ、それを身につけさせるための実践の場面設定が必要である。そのためには、学校生活の中で、その場面にあった正しい言葉使いについて学習したことを活用させる場面をつくる。具体的には、毎日の朝の会や帰りの会の司会を輪番制にして当番活動を行ない、生徒一人一人に実践の場を設定し、教師がアサーティブな表現を適切に活用しているか観察しながら評価する。
- (3) 部活動と学校生活の満足感を高めるためには、学級担任と部活動顧問教師との連携が必要である。そのためには、生徒の部活動での活躍や学級での頑張りなど褒める要素を共有し、さらに自身の状況や友人関係などの変容について情報交換をする。

(4) 部活動で身につけているソーシャルスキルが高い生徒は、学級活動において、そのスキルを積極的に活用しない傾向がある。それを改善するためには、日々の部活動の成果としてブロック大会以上で入賞することで、所属している部活動に誇りと自信を持つことができる。すると、自己肯定感が高まり自信を持って、部活動で身につけたソーシャルスキルを学級集団の中で発揮する。

3 終わりに

今日、部活動について様々な問題点が指摘されている。特に本県においては、学力低下に影響があるのではないかとこの事である。その問題点の例として、①毎日行なわれている、長時間における練習。②部活動と学習の両立が難しい。③早朝練習によって寝不足が生じ、家庭学習の時間の確保が難しい。などである。このような問題を解決するためには指導者の勝利至上主義に偏らない指導理念が大切であると考えられる。

そこで指導者は、生徒の心身の発達に応じた指導計画を立案して、日々実践することで逆に、学力向上へとつながっていくと考える。①について長時間における練習の解決法として、平日（授業がある日）は2時間程度、1週間に1回の休養日。休日は4時間程度にして1月に2回程度の休養日を設定する。②については、研究の成果にもあるように部活動で身につけているソーシャルスキルは、教科の動機付けにもなり学習意欲も向上することが分かっている。部活動顧問教師と教科指導教師がともに連携をとって、生徒を褒めることで、やる気につながっていく。③の早朝練習については、早寝早起きの基本的な生活習慣を定着させることで、時間に対するけじめも身につけていく。時間の大切さを実感することで生徒自ら計画的な学習を行えるようになり、意欲的に家庭学習に取り組むようになる。以上のことから、中学校期の部活動は、大きな教育効果をもたらす。生徒、保護者、指導者の三身一体になった粘り強い指導が、生徒の将来の生きる力につながると考える。

《主な参考文献》

- | | | | |
|-------|------|---|--------------|
| 文部科学省 | 2013 | 『中学校学習指導要領解説 特別活動編』 | |
| 吉田 浩之 | 2009 | 『部活動と生徒指導 スポーツ活動における教育・援助のあり方』 | 学事出版 |
| 吉田 浩之 | 2013 | 『部活動における生徒の援助ニーズを把握するための尺度作成』 | 教育実践総合センター紀要 |
| 河村 茂雄 | 2011 | 『Q-U式学級づくり 中学校 脱・中1ギャップ「満足型学級」育成の12ヶ月』 | 図書文化社 |
| 河村 茂雄 | 2012 | 『学級づくりのためのQ-U入門』 | 図書文化社 |
| 河村 茂雄 | 2011 | 『学級ソーシャルスキル』 | 図書文化社 |
| 河村 茂雄 | 2011 | 『Q-Uによる学級経営スーパーバイス・ガイドー中学校編』 | 図書文化社 |
| 河村 茂雄 | 1999 | 『生徒の援助ニーズを把握するための尺度の活用』 | |
| 新里 健 | 2008 | 『やってみようソーシャルスキル・トレーニング・33 学級を生かすSST』 | グリーンキャット |
| 島袋 有子 | | | |
| 園田 雅代 | 2002 | 『教師のためのアサーション』 | 金子書房 |
| 園田 雅代 | 2003 | 『子どものためのアサーション・グループワーク』 | 金子書房 |
| 吉村 斉 | 1997 | 『学校適応における部活動とその人間関係のあり方 自己表現・自己主張の重要性』 | |
| 石田 靖彦 | 2005 | 『中学校の部活動が学習意欲に及ぼす影響
—部活動集団の特徴と部活動の意欲に着目して—』 | |
| 亀山 恵介 | | | |
| 村山 重樹 | 2007 | 『望ましい人間関係を目指した学級集団の育成
—社会的スキルの定着を目指した実践から—』 | |
| 岡田 有司 | 2009 | 『部活動への参加が中学生の学校への心理社会的適応に与える影響
—部活動のタイプ・積極性に注目して—』 | |